

要性と地域固有の産物の収穫の大切さを、特定の神社を通じて示され、祭政一致をあらゆる形で実現せられたのではないかと考えられる。又、相嘗祭の奉幣に預る社は国家成立以前より人智の及ばぬ現象に対する畏怖を払拭し、大きな神の恵みの働きにより毎年、くり返し同じ場所で、定期的に一定量の穀物等の収穫を得るため、毎年くり返し神様に祈り祭る新穀感謝祭、つまり相嘗祭を斎行していた。その祭祀実績に基づき、国家の繁栄を祭祀で深く規定し、統一国家の体質を強化することが、相嘗祭の成立の要因と考える。相嘗祭の祭典執行者は、各社の神主であり、その祭祀に奉られる幣帛は、神祇官から受領されていた祭祀に際して七十一座の神々に奉献する処の幣物は、各々神社から神祇官を通じて、太政官に事前に申出て請い受ける事、又、酒料の稲も同じく申請してその料は、神税および正税から用いられていた。幣帛の品目種類は布帛類、海産物、筥、祭器、酒稻の五種類に分類することができ、特に祭器は神酒の醸造や供薦の用具や容器として、各社に奉献されたものと理解できる。その数量は社によって其々異なり、品目にも若干の差異は認められる。そして、相嘗祭の幣物は、自ら耕す神田からの収穫物を奉献し、神様に新嘗聞食して頂く祭祀が、相嘗祭という事であったので、酒料の稲は、神社の管理する神田からの新穀を用い醸造した御酒が重要な意味をもっていた。その理由は、人々は、米や野菜の生産を守って戴ける神様に、まず収穫物を捧げた。それらは、生活する自分の住む土地で採れた物を、産土神に奉献した食物を食べると、健康で長生きできるという教訓が出来上がっていたからである。神様は自然と共にあ

って森羅万象そのものが神様のお姿であり、穀物は人の力だけによって育つものではなく、農耕と云う共同作業の人々の願いが稔となって顕現される。その共同体の発達は、氏神の祭祀を導きだす。人と土は一体であつて人の命と健康は食べ物で支えられ、食べ物土が育てる。故に、人の命と健康はその土と共にあるという捉え方が根底にあり、相嘗祭幣物の酒稻料は神税及び正税から用いられたのであろうと考える。五穀の豊穰は、国民の生活の安定に欠かせぬ願いであり、それは、自分たちの土地で摂れる収穫物で生命の源を養っているという自覚があつた。相嘗祭の官幣に預かつた神社は、奈良盆地に大和国となる以前から、新穀感謝の祭祀として、信仰されていた神社であると考えられ、平安時代に入り新たに京中・山城国等の神祇が増加されていったと考える。

近世期における西京神人と御供所

—— 祭礼および営繕活動について ——

吉野 亨

京都府北野天満宮で十月一日から五日にかけて行われる瑞饋ずいき祭まつりでは、瑞饋神輿と呼ばれる神輿の形状をした神饌が、中京区西ノ京にある御旅所から北野天満宮周辺を廻る。この祭りの由来について『北野誌』『瑞饋神輿略記』では、北野天満宮に奉仕していた西京神人が奉仕の余暇に営んでいた農業で収穫した作物をお供えした祭りであるとされる。現在のように瑞饋神輿を掻き回る形になったのは、慶長十二年(一六〇七)とされ、祭りに供えていた神饌が次第に大型化し、最終的に神輿型に供

える新穀蔬菜を飾り付けるようになった。

この瑞饋祭は、既に岩井宏美や櫻井敏雄により神饌の事例として紹介、瀬川弥太郎により祭りの歴史が概説されている。しかしながら、瑞饋神輿という特色ある神饌がどのような事情から成立したのかは、先に上げた由来で語られる他、不明な点が多い。また瑞饋祭の歴史的な変遷についても、不明な点が多く論じられていない現状である。筆者も以前、瑞饋神輿についてその意義を論じた事があったが、その際に近世期における瑞饋祭の実態が『北野天満宮史料』等の史料から若干伺えた程度であった。また、瑞饋祭自体も不明な点が多い上、その祭りを行なっていたのが麴座神人として著名な西京神人であった。その点についてもこれまで論じられて来ない部分が多く唯一、三枝暁子により近世期における西京神人が、神職化していたことが指摘されている。そこで、発表においては瑞饋祭の担い手である西京神人、その活動の拠点であったとされる七保御供所と瑞饋祭の関係、及び御供所の営繕活動、それら近世期における神人の活動の意味について論じた。

そもそも七保御供所とは、西京(現在の中京区西ノ京)に存在した寺号を有する御供所で、神饌調理などを行っていたとされている。七保の名称の如く七つあり、安楽寺・東光寺・長宝寺・新長谷寺・満願寺・阿弥陀寺・成願寺と云う寺号であった。これまでその存在や所在については川井銀之介や三枝暁子により論じられてきたが、瑞饋祭との関係や、その活動実態については不明な点が多かった。

そこで、まず瑞饋祭と御供所の関係を確認すると、『北野誌』

『瑞饋神輿略記』に瑞饋神輿を作成する場所、そして清祓を行う場所として、御供所が登場する。しかし、これ以外の史料には瑞饋祭と御供所を物語る史料は確認できない。ただし、『北野天満宮史料』を見ると近世期において西京御旅所にて祭礼が行われており、また西京神人が御旅所に拝殿を造立するなど、独自に御旅所を運営していることが窺える。

では、御供所の設備や運営実態は如何様なものであったのか。旧神人である本郷家が所有していた『本郷家文書』には、御供所の安楽寺・新長谷寺の図面が残されており、宗教設備と御供所が同じ敷地内に配置されていたことが分かる、また営繕活動については、西京神人による縁起や札配りが行われており、これらの配布活動は、御供所にある御神像の御開帳を宣伝する活動であった。この御開帳により、浄財を集めそれらを御供所の運営資金としていた実態が指摘出来る。

以上、現段階において、瑞饋祭と御供所の関係は『北野誌』『瑞饋神輿略記』に記されている内容のみで、その他史料からは裏付けることが出来ない。ただし西京神人の手により御旅所を運営し、祭礼が展開していたことが確認出来る。また御供所の営繕活動に際して、札を配り御開帳を行う等して、営繕の資金を集めていた。これらの活動の意味は西京神人が神人身分を確保しながらも為政者に左右されない宗教者としての独自性を確立する意味があったと推察される。